

宝彩有菜の

バガヴァッド・ギーター

第7回「神とは、宇宙とは、生とは、死とは」

text: 宝彩有菜

バガヴァッド・ギーターの第七章は、神や、宇宙についての知識が語られています。クリシュナは、アルジュナに向かって、「アルジュナよ、よく聞きなさい。心を私に密着させて、全意識をもって修行することだ。そうすれば疑いなく私を知る。」(7-01)と言います。そして、「今ここで、五感で認知できる現象と、認知が不可能な神の領域についての完全な知識を君に与えよう。それを知ったら、それ以上に知るべきものは、この世には何一つない」(7-02)と言います。これで、全部だと言います。他に知るべきものはないということですから、是非、私たちもしっかりと聞きたいものですね。

クリシュナの説明が、始まります。「全宇宙における見えるもの全てと、見えないもの全ては、私から始まって、私で終わっている」(7-06)クリシュナは、神ですから、世界は、私から始まって、私で終わっていると言います。

そして、「アルジュナよ、私は過去も、現在も、将来のこともことごとく知っている。私は全てを知っているが、でも、誰も私を知らない」(7-26)と言います。なにか、全部を知ってるなどと、もったいぶってますが、では、どうすれば、私たちはクリシュナを知る事ができるのでしょうか？

「アルジュナよ。全ての生物は、幻影の中に生まれ、自らの欲望と憎悪より生じた二元相対の世界を実在と錯覚している」(7-27)

錯覚しているから、知る事ができないのだと言っています。二元相対の世界が、実在だと思っているが、実際は、そうではない、ということなのでしょう。「二元相対ではない世界」というのは、どんな世界なのでしょう。それは、ここでは出てきませんが、話は先に進みます。

「過去における多くの生涯も、また今生でも、清らかな生活をした人、また悪業報を断ち切って、二元相対の迷妄を払い除けた人々は、確固たる心で、私を敬愛する」(7-28)

過去における生涯とは、「生まれ変わりがある」という前提です。輪廻転生が、インドの常識ですから、そのような言い方が入っていますが、ここでのポイントは、二元相対の迷妄を払い除けたら、クリシュナを知る事が出来るということです。

ちなみに、西洋では、輪廻転生ではなく、死んだら、天国に行くか、地獄に行くのがその死生観です。

ついでに、説明しておきますと、輪廻転生の死生観では、「悟る」と、もうこの世に出て来ることはないと言います。生まれ変わることはないと言います。しかし、ちゃんと悟るまでは、何度でも人生をやり直すことになるそうです。

天国地獄の死生観では、悪行をしなければ天国に行けるということになります。

普通、人間は死ぬのは怖いですから、もし、死んだら、天国があるなら、天国に行きたいと思うのが当然です。また、もし、輪廻転生なら、また、人間として戻りたいと思うのが当然です。

ですから、「悟る」と輪廻転生の輪から外れて、二度とこの世に生まれてこないというのであれば、それは「悟る」と逆に「損」をするような気がします。変な感じです。

「そうですよ。笑雲先生。悟ったら、もう、戻って来れないのだったら、それじゃ、苦勞して悟った意味が無いじゃないですか。大変ですよ。でも、ああ、良かった。小松茸は、まだ大丈夫ですね」

「なにが」

「だから、まだ、悟ってないし、このまま悟らなくても。いや、悟らない方が。悟らなければ、また、この世にまた戻って来れるのだから、悟らない方が良い。ああ、危なかった。もうちょっとで危うく悟るところだった。セーフだったなあ。やれやれ。あつ、笑雲先生は、あはっ、アウトですね。残念でした」

「あはははは、何を言ってるの」

「ええ、ですから、輪廻転生ですから、悟ると、その輪廻の輪から落ちるんでしょ。それであつちに行つたきりで、戻って来れなくなる」

「ああ、なるほど。そう考えているのか。それじゃ、当然、修行に身が入らないわけだなあ。なるほど」

「それはそうですよ。冗談じゃない、危うく悟るところだったですからね。おー、危ない、危ない」

「あれあれ、なるほどね、そう誤解してしまうのか」

「あれ、誤解ですか？ だって、『悟ってしまって生まれ変わらない』のと、『悟らなくて生まれ変わる』のと、どちらか、一方を選びなさいと言われたら、当然、『生まれ変わる』方でしょう。誰が考えても」

「なるほど。そうか。小松茸、このバガヴァッド・ギターの第七章と次の第八章は、とても大切なことが書いてある。なぜ、悟ると輪廻転生から外れるのか、また、それはどういう意味で、それがどれほど素晴らしいか」

「ええ、なんですって。生まれ変わらないのが、素晴らしいことなのですか。小松茸は、全然そうは思いませんけど。たとえ貧乏でも生まれ変わった方が良い」

「そうだね。それは誰でもそうだ。輪廻転生から外れる意味が、どういう意味かそれが分かっていると、小松茸のような感想になる」

「じゃあ、輪廻転生から外れるというのは、どういう意味ですか？ 笑雲先生？」

「それは、一言で言えば、自分は死なないということが分かることなのだが、死なないと言うと、すぐに、そんなのウソだ、誰でも死ぬじゃないですか、という議論になる」

「そうですね」

「だから、同じことを、言うのに、死なないのだから、従って、生まれないという表現になるわけだ」

「死ななければ、生まれ変わらない。それはそうです。輪廻転生ですから、死んだら生まれ変わります」

すが、死ななければ生まれ変わることもできませんからね。だから生まれない」
「そうだ。すると、結局、輪廻転生から外れるということになる」
「えっ、よく分かりませんが。笑雲先生、いったい何を言っているのですか」
「それは、そうだ、なかなか分からない。アルジュナもよく分からないから、クリシュナに執拗に聞いている」
「なるほど」
「ということで、しばらく、クリシュナの説明を聞こう」
「はい」

クリシュナは、先程の続きで、アルジュナに説明しています。
「老や死から解脱、解放されようとして、賢い人は、私に安らぎを求め修行する。するとやがてブラフマン(神)を知り、アートマン(真我)を知り、カルマ(行作)等すべてを知るようになる」(7-29)

人間の一番の心配事は、老や死です。特に「死」は、その先が分からないのでとても怖いものだ、とマインドは考えます。当然です。肉体は命あるものですし、いつかは老いて死にますが、それと一緒にマインドも死ぬわけですから、「死」は、とても怖いものになります。その恐さから解放されようとして、その恐さを克服できるものなら克服しようとして、人は、修行をします。

そうすると、その修行の過程で、ブラフマンやアートマンやカルマを知るようになると言っています。

そして、クリシュナは続けて、言います。
「私が全ての物質現象を支配し、また霊界、神界すべての支配者であると知る人々は、臨終の時でも、不動の信念で私を礼拝し、私を心から離さず、一体のままである」(7-30)

これは、悟った人は、死ぬ間際でも、ブラフマンとアートマンが一体であることを、その気になれば、ちゃんと確認できるという意味です。つまり、自分は神(宇宙)の一部だということを忘れないということです。

(第八章)

クリシュナは、いろいろ説明してくれますが、アルジュナは、ますます分からなくなってきました。そこで、第八章では、アルジュナが、ズバリ、仕切り直しに、質問してくれています。

アルジュナが、クリシュナに問います。
「クリシュナよ。(ズバリ聞きますが)ブラフマン(神)とは何ですか。そしてアートマン(真我)とはどんなものですか？ また、カルマとは？ 物質現象とは。また、いわゆる神界とはどんな所ですか、説明して下さい」(8-01)

とても、簡潔で的を絞った素直な質問をしています。

そして、さらに、クリシュナに聞きます。

「神が、私たちの身体の中に住んでいると言われるが、いったい、我らの肉体の中の、どの部分に、どのようにして住んでいるのでしょうか。

また、信仰を持ち修行している者が死ぬ時、あなたと一体になると言われるが、あなたはどのようにして私に会って下さるのか？（そこのところをちゃんと説明していただきたい）」(8-02)

このように、アルジュナの質問は、とても、具体的です。

確かに、アルジュナの言うように、神があなたの中に宿っていますよと言われても、そんなのは、実感として分かりません。死ぬ時に会えますよなどと言われても、それも良く分かりません。

そのアルジュナの質問に、クリシュナが答えます。

「ブラフマンは不壊不滅にして、永遠無限の実在、つまり、宇宙に遍満する。そのブラフマンが個人に宿るとき、それをアートマン(真我)と言う。魂である。そして、あらゆる現象を生み出す活動を、カルマという。それもブラフマンが源泉である」(8-03)

このあたりになってくると、段々、宗教的になってきます。宝彩瞑想は、科学ですから、注意深く検証しながら進むことにします。納得のいかないものを鵜呑みにすることはしないようにしましょう。

まず、アートマン(真我)とはなにか。神の一部が自分の中に在るなどということは、科学的ではないような気がします。それからまず、検証してみましょう。

人間は、生まれてから、すぐに、体験したことを、学習しながら成長していきます。マインドは、考える機能ですから、体験したことを解釈、学習してプログラムを作っていきます。そのマインドの働きは、瞑想の修行をしっかりとすると、次第に詳細に、客観的に観察できるようになってきます。

そして、修行が進めば、「マインドは、自分自身ではない」ということが分かりますし、その自覚が持てるようになります。

「マインドは実に良く働く精密な計算機だ。思考機械だなあ」という感想になります。「でも、マインドは自分自身ではない」と分かります。

ということは、そうですね。マインドをそのように客観視する「本当の自分」がどこかに居るということに気がつきます。マインドは優秀な精密機械だといっている本人が居るということです。

本当の自分、名称はどうであれ、「アートマン」が在らないしは居る、ことは分かりました。

では、その本人、つまりアートマン(「本当の自分」)は、どこから来て、どこに居て、どこへ行くのでしょうか。

マインドも、肉体も、この世に生まれたときに、授かったものです。その授かった肉体と一緒にマインドもそこにありました。

では、「本当の自分」とは、一体何なのでしょう。

クリシュナは言います。

「物質自然は絶え間なく変化するが、物界霊界神界を含む大宇宙は神の体である。そして各個人に

宿るアートマンは、その至上主であるブラフマン、私自身なのだ」(8-04)

アートマンとは、大宇宙を司っているブラフマン(神)の一部だと言っているわけです。ブラフマンが、個人に入ったものが、アートマンだというわけです。

と言われても、実感が普通ないですね。本来の自分が、神や宇宙の一部で、それと同じものだという実感。

そして、クリシュナは、アルジュナに、

「死の時が来て肉体を離れるとき、私だけを憶念する者は誰でも、まっすぐに私の所に来る。疑いあるべからず」(8-05)

と言います。

ここで、私が思い出すのは、ソクラテスが毒杯を飲まされるときに、弟子に言った言葉です。

そばで、泣き悲しんでいる弟子達にソクラテスが言います。

「もう、私は死刑の宣告を受けたのだから仕方ない。ごちゃごちゃ言うな。それより、静かにしてくれ。私は、今から、毒杯を飲むわけだ。そしてマインドが消えるときに神の元に戻るのを見届けたい。これは最後で一度のチャンスだ、邪魔しないで欲しい」と言います。

つまり、クリシュナが言ったことと同じことですが、肉体やマインドから、アートマンが離れるときに、ブラフマンのところに戻るのを、ソクラテスはしっかり観察したいと言っているわけです。ソクラテスは、それを知っていたのでしょね。だから、そのように言う事ができたのだと思います。

「プリターの息子よ。常に訓練して、至上者(神、ブラフマン)を瞑想せよ。決して他のものに心を散らしてはいけない。そうすれば必ず私のもとに来るのだ」(8-08)

いつも修行をしっかりとしていると、死ぬときでさえ、迷うことなく、ブラフマンのところに戻れると言っています。

「だがこの未顕現、顕現の現象を超えて、さらに奥の世界が実在する。それは永遠不滅、この宇宙が絶滅してもそのままである」(8-20)

「その非顕現の清浄界こそ、不滅の妙楽世界であり、そこに到達した者は決して物質界に戻らない。そこが私の居所である」(8-21)

このように言うのは、輪廻転生の死生観があるからですが、ここの部分は、天国の死生観とよく似ています。

「すべてに勝る神のもとには、不動の信仰によってのみ到達できる。かれは至上の住まいに在って、しかも、全宇宙に充滿し、万生万物はかれの内に存在する」(8-22)

このあたりは、同じ内容を言葉を変えて言っていますが、要するに、ブラフマンは、宇宙そのもの、宇